

# SRID NEWSLETTER

No. 322 SEPTEMBER 2002 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎  
〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

9月号

「ODA改革」、「外務省改革」で思うこと 民主党政務調査会勤務 樋口博康  
利尻島の旅から 国際協力事業団 青年海外協力隊事務局 辻岡政男

## お知らせ

1. 休会復帰 間島徳次郎さん  
社団法人 海外運輸協力協会 観光開発研究所 主任研究員  
  
休会 島田 剛さん  
退会 黒子 孟夫 さん
2. 懇談会 9月17日(火) 国際協力銀行開発金融研究所 大会議室  
テーマ：ヨハネスブルグ・サミットとNPO研修・情報センターの取組み(仮題)  
講師：NPO研修・情報センター代表理事、世古一穂氏
3. 幹事会 10月8日(火)
4. 婦人クラブバザーご協力をお願い  
10月13日(日) 自由ヶ丘女神祭に婦人クラブが出店いたします。  
ご家庭にご不要の海外の土産品などございましたら、9月30日までに三上 洋子宅  
(〒107-0062 港区南青山6-12-3-804) 宛てに送って下さい。  
売上金はバングラデシュの学校に寄付します。

## 「ODA改革」、「外務省改革」で思うこと

民主党政策調査会勤務 樋口博康

今回、SRIDニューズレターへの原稿のご依頼を頂き、大変恐縮しています。国際協力や開発分野に直接関係する職場から離れて3年弱。このところSRIDの活動からも遠ざかってしまい、正直言って浦島太郎状態です。そういうわけで、何とか辞退できないものかとも思いましたが、名簿順で会員の義務とのことで、あえて恥を偲んで書かせていただくことにしました。

政府開発援助（ODA）については、これまでも色々な問題が指摘され、様々な改善が重ねられてきました。戦後の賠償に始まり、日本企業の輸出振興や途上国の一部権力者との癒着などの批判を受けた時代から、徐々にではあっても、わが国外交の大きな柱のひとつとして、80年代の5次にわたる中期目標などによる量的拡大、90年代のODA大綱の策定や改革懇談会等による質的側面や実施体制の改善など、質量ともに世界最高水準を目指してきたことは確かです。その間、国際的にも開発や援助に関する理論や実践が積み重ねられ、手法やアプローチに多くの工夫がなされ、専門家や開発分野での人材も多く育ち、援助もより効果的に行われるようになってきたと思います。また、情報公開が進められ、国民の理解も深まってきました。JICAや青年海外協力隊は、多くの途上国で、日本の顔として定着し、日本と日本人への評価を高めてきたと思います。また、NGOの実績と粘り強い働きかけもあって、ようやく最近ではNGOとの連携や支援の態勢も整えられつつあります。ODA白書の巻末の年表をながめていると、本当に隔世の感があります。

それにも拘わらず、ODAは、相変わらず厳しい批判の矢面に立たされています。特に、日本経済が低迷を続け、国家財政が今後の少子高齢化社会を考えるとますます厳しくなる中で、ODAへの風当たりは強くなる一方です。さらに、ODA政策の要である外務省における一連の不祥事が、これに拍車をかけています。個人的な汚職犯罪ばかりでなく、鈴木宗男衆議院議員との「ずぶずぶ」の関係、北方支援事業やコンゴ民主共和国大使館臨時代理大使問題への対応、不審船事件や在瀋陽日本総領事館事件、そして何よりも国会審議における誠意のない答弁など、組織全体の弛緩したモラル、隠蔽体質や危機意識の低さなど、これまで国民の目にあまり晒されることのなかった外務省の実態が次々と露呈され、何をやっても疑いの目で見ら

れるようになっていきます。前職の時にお会いした外務省の方々からは、とても想像もつかない事態の展開に、大きな驚きと悲しみを感じました。冷戦後、国際社会が激しく変化する中で、わが国の主権と国益、国民の安全や繁栄を確保する手立ては、外交しかありません。私は、ここ数年の外務省の大混乱は、日本外交そのものの危機といっても過言ではないと思います。

先般、外務省を変える会が改革提言を出し、それをもとに外務省はアクション・プランを策定しました。これまでも、いくつも改革案が提示されてきましたが、それらはどうなったのか。少なくとも今回の改革については、確実かつ迅速に実行してほしいと思います。また、第2次ODA改革懇談会の最終報告を受けて、6月にはODA総合戦略会議を立ち上げ、7月に「ODA改革：15の具体策」を発表しています。今回の改革案は、国民参加、透明性、効率性を柱に、監査、評価、NGOとの連携、人材育成、情報公開・広報についての改善策をまとめたものです。内容的には、率直に言って、かなり以前から色々と指摘されてきた問題の改善策をひとくくりにしたような感じで、まだこのレベルの議論をしているのか、とある意味では焦りのようなものを感じました。どちらも必要な改革でしょうが、改革と呼ぶには、どこか物足りなさを感じてしまうのは私だけでしょうか。

外務省改革もODA改革も、冷戦後の国際社会における日本外交のあり方の中で、一体として考えていくことは、当然だと思います。国際社会の状況や歴史的な視点から、日本がどういう外交を展開し、そのためにはどのような組織や体制が必要であり、ODAをどのように使っていくのか。そういった議論があまり見えてきません。私は、わが国が世界に貢献し、わが国への信頼と平和的な国際環境を築いていくための大きな外交手段としてODAはあると思います。国際情勢の変化を反映しつつも、国際機関や各国の要請に受動的に対応するばかりでなく、より主体的なわが国の外交政策として、ODAの地域的配分や重点分野、実施方法などを柔軟に見直していくことが必要ではないでしょうか。国際テロの危険性が喧伝される中で、貧困削減や民主化、人権、教育、環境、難民、感染症など様々な人類の尊厳と安全保障に関わる地球的な問題が山積しています。アフガニスタンなど紛争後の復興支援や人道援助もあります。日本の外交のあり方と国際社会全体の福祉向上という視点で、ODAの位置を再度確認し、その政策目的実現のために、組織、制度、運営、人材など根本的に見直す必要があると思います。

## 利尻島の旅から

国際協力事業団

青年海外協力隊事務局 辻岡政男

8月、利尻島へ旅した。早朝、飛行機で羽田から旭川に向かい、そこから稚内までバスで移動、そして稚内からフェリーで利尻島に渡った。利尻島の港についた時は夕方近くになっていた。さすがに涼しい。土地のガイドさんによると、富士山の2千数百メートル位の所と同じ気温らしい。この気候によって利尻島には黄色い可憐な花びらのリシリヒナゲシなどの高山植物が咲く。島の中央には高さ約1千7百メートルの利尻山、通称利尻富士がきれいな円錐形をしてそびえ、海の上に浮かび上がっているよう見える。

利尻島を観光バスで巡っている時、ガイドさんに、「幕末、この島にマクドナルドという人が上陸したと本で読んだのですが」と話すと、「それでは、そこで臨時休憩しましょう」と親切にその上陸地点に止まってくれた。そこは野塚（のつか）という見晴らしが良いところで、バスを降りると青空を背景にした美しい利尻富士が見えた。この下の海岸にマクドナルドが上陸した。のぞくと、崖の下に狭い砂浜があり、さざ波が寄せている。眼を上げると、紺色の海がさえぎられるものもなく水平線まで広がっている。

マクドナルドは少年時代に、太平洋を漂流してアメリカに流れ着いた日本人についての話を聞いたことがあり、それが日本への関心として膨らんだという。そして、成人して日本に行くことと決めたとき、捕鯨船の乗組員になった。1848年6月、マクドナルドは日本の陸地が見えるところで捕鯨船から降ろしてもらい、ボートでこの野塚にたどりついた。当時24歳であった。冒険心に満ちていたとはいえ、この広い海に一人で浮かんでいるときはやはり心細かっただろう。

利尻島に上陸したものの日本は鎖国中なので、漂流者扱いとなり長崎へ送られる。マクドナルドは半年後には長崎からアメリカへ送り返されるが、その間、長崎奉行所の要請により、日本人の若手の通訳に英語教室を開いた。英語を習い始めた一人が、マクドナルドと同年の24歳の森山栄之助であった。森山は、正月休みも惜しんでマクドナルドの元に通いつづける。森山がマクドナルドから英語を学び始めた時、手にした英和辞典は単語数6千語で発音のカタカナ表記がオランダ語訛りで書かれてあり、そのとおりに読んでも全く通じなかった。例えば、口はムース、指はフィ

ンゲル、独身者はバッチェロルと書かれている。森山は、オランダ語訛りの発音をマクドナルドから聞く英語に書き改めた。森山は、やがて幕府から認められて、1853年ペリーの黒船が来航した時、首席通詞として活躍する。マクドナルドにとっても、森山との交流は日本のすばらしい思い出として残った。

利尻島の風景を眺めながら、思いがけず幕末の日本を想像した。当時、日本の周囲には鯨がたくさんいて、英米の捕鯨船がそれを追ってこの北海道まで来ていたこと。長崎出島の日本人の通訳は中国語とオランダ語専門で、英語に通じた人がいず、江戸幕府も長崎奉行所も大変困っていたこと。

一方、14歳の時に漁に出て漂流し、アメリカの捕鯨船に助けられた土佐の漁師、ジョン万次郎もこの頃日本に戻ってくる。万次郎は日本の郷里では貧しく寺子屋にすら通えなかったけれども、救ってくれたホイットフィールド船長の世話によりアメリカで3年間正式な教育を受けた。その後、捕鯨船の乗組員などをしながら計10年間に及ぶアメリカ生活の経験を積む。そして1851年、万次郎は琉球経由で日本に戻った。24歳になっていた。万次郎はアメリカについての知識と英語力を認められ、黒船来航の予報により混乱の中にあつた幕府に引き立てられて活躍する。幕末の日本は、諸外国との交渉と異文化コミュニケーションの難しさに悩まされた時期であつた。

利尻島から礼文島を経て稚内に戻る日、雨風が強くフェリーボートは揺れた。少し船酔いした家内の話ではトイレの前は行列だったそう。マクドナルドが利尻島に上陸した時代の木造の小さな船であつたなら、今日の海では木の葉のように揺れていただろうと想像した。まさしくマクドナルド、森山栄之助、ジョン万次郎の三人の人生そのものが、鎖国から開国へ至る日本の変動期にめぐりあわせて、大きく揺れる船に乗っているように波乱に満ちていた。そしてその中で、三人はそれぞれが信念にもとづいて積極的人生を切り開き、近代日本の国際交流のさきがけを果たした。

(2002年8月16日)

[参考資料]

海の祭礼 吉村昭 文春文庫 1989年

マクドナルド「日本回想記」 ウィリアム・ルイス、村上直次郎編、1979年

中浜万次郎集成 川澄哲夫編著 2001年

